№3022

# ソ連期における民族文化の変容－現カザフスタン共和国を中心として－

早稲田大学人間総合研究センター 招聘研究員
齋藤　篤

本研究では、カザフスタン共和国（以降カザフスタン）がソビエト連邦（以降ソ連）に所属していた時代に、同国人口において大きな割合を占めるカザフ人がどのように民族の伝統を実践していたかについて、旧首都アルマトゥ市という社会主義体制の影響を強く受けたと考えられる地域を対象として、聞き取りを中心に調査を行った。

調査により得られた語りから、カザフ人が現在執り行う伝統実践とソ連期における伝統実践を比較すると、現在カザフ人が婚姻する際に執り行われることが見られるモスクでの宗教的婚姻登録が行われないなど、主にイスラームの要素が介在する儀礼に関して、実践内容に差異が見られたことが考えられた。また、ソ連期においては、カザフ人は自民族の伝統についてさほど興味を持っていなかったことについての語りを得た。さらに、今日カザフ人が儀礼など祝いの際に執り行う祝宴「トイ」に関して、ソ連期においては「コムソモール（共産主義青年同盟）のトイ」という形式があったという語りを得た。「コムソモールのトイ」の内容については、「結婚の際に、同僚たちと通常のパーティーを行い、郊外の村では盛大な式を行った」という語りや、「現在のハラル・トイと同様である」などの語りを得ている。ハラル・トイはトイにおいて飲酒や男女混じっての踊りを行わないなど、イスラームにおける「ハラール」をトイに適用しようとするものである。こうした「コムソモールのトイ」に関する語りからは、ソ連の社会主義体制下において民族の伝統を実践することについては、当時の社会道徳面からの懸念があったことが考えられる。

今後の課題としては、ソ連期における伝統実践の聞き取りに加え、ソ連圏外から移住してきたカザフ人と、国内のカザフ人の伝統実践の差異に着目することが重要であると考えられた。また今般のコロナ禍の情勢を踏まえて、リモート技術を活用していくことが重要であると考えられた。